(33) 『古代詩論の方法試論（その1）』で、大嘗祭に国栖奏が奏される意味について分析したが、それが神武紀などに記されているが、そういう記事は国栖の服属の由来で、語りがあったとすべきである。

(34) 土謡においては、土謡から抒情詩、叙事詩、叙景詩、儀式詩と分化して詩に上昇することを『古代詩論(その2)』で論じた。ただし儀式詩は別として、他の三者についてはこういうような分け方でよいかどうか現在は疑問をもっている。

(35) 訓みは岩波古典文学大系本によった。

(36) 童子女の松原については、三浦佑之が夜の視界の奪われた世界から明け方にいたる時の幻想であることを論じており（『闇――幻想領域の始源――』古代文学会発表、昭50・1）、参考になった。

夏期セミナー発表要旨

黄泉国と根国

――死後世界の構造――

三浦佑之

古代人の死あるいは死後世界に対する認識の一端は、黄泉国と根国という、異質な両者にみることができる。ところが、この二つの死後世界は、それぞれ異った性格を示していながら、記紀神話という体系的な神話の中では繋がりをもって描かれている。根国は書紀で具体的な神話をもっていないので主に古事記の叙述を扱うが、そこでは「妣国」と「黄泉比良坂」という二つのことばによって、黄泉国と根国は結ばれている。

妣国は、イザナキが涕泣の理由を尋ねたのに対してスサノヲが「僕は妣国根堅州国に罷らむと欲ふ」と答えるところに出てくる。スサノヲにとって妣（亡き母）は、古事記の文脈からいうとイザナミであり、とすると、妣国とは黄泉国だということになる。一方、黄泉比良坂は、黄泉国神話ばかりでなく、生大刀生弓矢と天詔琴をもってスサノヲから逃れるという、オホナムチの根国訪問神話の最後にも現われている。つまり、古事記神話によれば、黄泉国及び根国の地上との出入口は、同じ黄泉比良坂となっているのである。

この、妣国と黄泉比良坂ということばをみる限り、黄泉国と根国とは一つの世界だと思える。また、イザナキの黄泉国からの逃走とオホナムチの根国からの逃走の神話は、ほぼ同じ語り口をとっている。そうした点から、西郷信綱氏も「両者はほぼ一体であるとしてよかろう」とし、「黄泉の国と根の国とは、地下という一つの世界の二つの側面、一つのものの二つの違ったあらわれである」と考えている（『古代人と夢』一二八頁）。確かに、古事記の文脈に即して構造を考えてゆく場合には、「一つの世界の二つの側面」というとらえ方は有効かもしれないが、黄泉国と根国との本質的な性格を考えようとする場合には、いささか問題がありそうである。つまり、両者は果して「一つの世界」といえるか、ということである。もとは異質な両者を、記紀神話という体系神話が「一つの世界」にくっつけてしまったと考えた方が正しいのではないかと思うからである。

妣国について言えば、妣＝亡き母という中国文献の引き写しが、どれだけ真実を語っているかは疑問とせねばならない。ただ、古事記が妣の字を選んだところには、亡き母イザナミと結ぼうとする意識が当然あるだろう。としても、古事記の文脈は、母の死後、父イザナキ一人の生んだ子スサノヲが妣国へ行きたいといって泣いたという矛盾を胎んでいることは否めない。結論をいうと、妣国とは根国（根堅州国）でしかなく、そこは先祖たちの魂の宿る世界と考えられているとみるべきであろう。つまり、妣

とは、亡き母も含めた祖先たちと考えてよく、そうした死者たちの魂の集まる世界が根国と考えられており、そのために「妣国根堅州国」と表現されているわけで、古事記の文脈から独立させた場合、妣国を黄泉国とする根拠は見出せないのである。一方、黄泉比良坂は、その名称からも黄泉国への出入口以外には考えられない。古事記で根国と地上との出入口と語るのは、黄泉国と根国をともに出雲国に割振るという、記紀神話体系のイデオロギーによるもので、古事記の体系から切り離した根国訪問神話においては、出入口を黄泉比良坂とする語り口をもっていなかったと思われる。また、逃走譚の類型は世界的に分布しており、同じ語り口をとっているからといって黄泉国と根国とを一つの世界とみることはできない。古事記は、黄泉国と根国という全く異質な二つの世界を、神々の系譜化と同様の意識によって一つの世界に繋ごうとしている。そしてそれは、三品彰英がいう如く「根ノ国の祖神であるスサノヲ」と「高天原系の祖神」アマテラスとを「同胞として血縁的に結びつけ」ようとしたためであろう（「日本建国神話の三類型」論文集第一巻所収）。高天原系の祖神アマテラス及び月ヨミはイザナキイザナミの子として語られていたであろうが、その対立者スサノヲはもともと根国の神であって、アマテラスの兄弟などではありえなかった。とすれば当然、黄泉国と根国は、その神話の系統を異にしていたとみなくてはならない。そして、その系統の違いが、同じ死の世界を描きながら全く違う死の姿と死後世界とを現出させているということができる。

そこで次には、それら両者の世界が死をどのように描いているかということを、それぞれの神話から具体的に考えてみたい。

はじめに黄泉国について述べよう。黄泉国は、古事記と書紀第五段第六の一書などに記されているが、火の神を生んだために死んだイザナミの行った世界と語られる如く、死者の行く世界として描かれている。そして、そこの住人（死者）と地上の住人とのわかれ目は「黄泉戸喫」であり、死の世界の食物を口にすることで死者は二度と地上にもどれなくなると意識されている。そこで、イザナキはイザナミの姿を「一つ火燭して」覗き見る。これは、黄泉国が暗闇であることを示している。全く明りを拒否した闇の世界に死者イザナミは横たわっているのであり、それが死後世界における死者の在り方であった。このことからも、黄泉（ヨミ）の語源はヤミ（闇）の転訛だとする説を支持すべきだと思う。

さて、そのイザナミの姿はというと、ウジタカレコロロキテ、体には「八はしらの雷神成り居」る状態であった。この描写は、まさに腐爛死体そのものの印象をもつわけで、黄泉戸喫をしてしまい、闇の中に身を横たえる死者イザナミは、肉体の腐爛という、誠に生々しい姿によって語られている。このことは、死が肉体の腐爛という具体的な視覚から認識されていることを示すわけで、そこには死者の魂や地上への再生などの古代的意識を拒否した死の姿がある。つまり、黄泉国とは、死そのもの、闇そのものとして描かれており、再生を拒否した死の世界だということができる。そのことは、この神話の結末で、千引の石をはさんだイザナキとイザナミとの「事戸度し」にも現われている。黄泉津大神イザナミは「一日に千頭絞り殺さむ」と、死だけを司り、誕生は地上の側に逃れたイザナキが担当する。イザナミは、黄泉国の大神として、死を司る存在と意識されているわけで、この点からも、再生を拒否した死が見据えられているということができる。

それに対して根国は違う。根国もやはり死者の行く世界という認識をもつが、それは再生を伴った死である。八十神の迫害を逃れ木国に行き、そこから根国に向かうオホナムチは、地上における死を通過している。八十神のために「氷目矢を打ち離ちて、拷ち殺」され、木国でも「矢刺し乞ふ時に、木の俣より漏き逃が」れるという、死に等しい扱いを受けた後の根国訪問である。又、根国でも根国の大神スサノヲによって課せられる試練を通過することで、死と再生とを体験する。これは、成人式の籠り屋における若者たちの幻視の神話化とみるべきで、根国の暗さや死の印象は、そ

うした成人式がもつ死と再生の意識を反映していると考えられるわけだが、とにかく、古事記の根国神話では、オホナムチの地上での死と、死や暗さを印象化させる根国訪問が語られている。しかし、その死や暗さは、黄泉国のそれとは全く異質であるといってよい。ここには、黄泉国には認められない明るさと再生の意識とがある。明るさは、スセリビメの存在やオホナムチの試練の克服にみられるし、再生は結末におけるオホナムチの地上への再出現にみることができる。それは、スサノヲの力（生大刀生弓矢・天詔琴）をも受け継いだ新しいオホナムチの誕生ということができる。ここには、死を通過することで新しい生命が誕生するという、古代的死生観が感じられる。根国の明るさには、こうした死の裏にある再生の意識が反映しているとみてよいだろう。

このように、根国は、折口信夫や柳田国男のいう如く、沖縄のニライカナイに近い。しかも、根国のネとニライのニは同源で、根国といった意味である。そして、こうした暗と明・死と生とが共存する根源の世界こそ、古代人の考えた死者の行く世界であり、生命の誕生する世界である。またそこは、禍いの住むところでもあり、幸いをもたらす神の住む世界でもあった。ニライカナイが海上遥か彼方と考えられるのに対して、古事記の根国は地下世界の印象が強い。しかし、それも先の黄泉比良坂ということばなどを除いて考えた場合、地下に限定するのは問題である。たとえば、大祓祝詞にみられる根国底国は海中として語られている。黄泉国が完全に暗黒の地下世界として語られるのに対して、死と生の根源である根国は、地下でもあり海中でもあり、またニライカナイの如き海上遥かな島でもあり得るというのが本来の性格とみることができる。根国の一面の明るさは、こうした根国の在り方からも知ることができよう。そしてまた、根国は、ワタツミの国や常世国へと展開し得る可能性をもっている。生と明るさという根国の一面が肥大してゆくことでワタツミの国へ接近し、それが神仙思想などの影響を受けて内的展開を遂げることで楽土としての常世国は古代人の想念の世界として構築されてゆく。それに対して、黄泉国は、こうした類似の世界をもたず孤立的な世界として存在している。

結論だけを述べたため理解しにくいと思うが、とにかく、黄泉国と根国とは全く異質な死と死後世界を描出しているということができる。それは、古代人の死の意識や死後観を考える上で大きな問題を胎んでいる。黄泉国と根国の違いを単に神話の系統論へ帰納するのではなく、死の意識や死生観を探る糸口としてとらえ直す必要があると思われる。

根国神話のもつ再生の意識には、魂の存在が関わっている。それが古代的死生観の基本的な在り方であろう。一方、そうした魂の存在を感じさせない黄泉国神話は、新しい意識をもつとも考えられるが、それよりも、肉体の腐敗に顕著にみられる〈死〉という現実に対する、人間の根源的な畏怖を現わしているとみるべきではないかと思っている。そして、そうした畏れが、〈魂〉を求め、魂の宿る世界を幻視していったのであろう。

古代における死と文学・非業の死

――霊異記の場合――

露木悟義

一昨年六月の説話文学会大会で、新出の来迎院本日本霊異記（平安朝後期ころの書写か）が紹介されてから、霊異記の研究は一段と賑々しくなった。特に、守屋俊彦氏の『日本霊異記の研究』（三弥井書店、昭49・5）に次いで、志田諄一氏『日本霊異記とその社会』（雄山閣出版、昭50・8）、八木毅氏『日本霊異記の研究』（風間書房、昭50・11）、中田祝夫氏訳注『日本霊異記』（小学館、昭50・11）と出版があいつぎ、ついに『日本霊異記漢字索引』（桜楓社、昭50・11）が春日和男・原栄一氏によって編まれ、斯界研究史上かってなかった盛興を現出した。学会でも、今年度の説話文